【研究報告】

民族を横断する親族：チベット高原牧畜民にとっての集団

シンジルト
（熊本大学大学院人文社会科学研究部）

1. 民族境界理論と生業

フレデリック・バルトの境界理論が、今日の学問的な民族研究を方向づけてきた（Barth 1969）。後にバルトは、自らの調査対象である牧畜民の事例を中心に境界維持と生業形態との関連を次のように指摘した。牧畜民的な集団生成は財産や物理的な境界によるのではなく、共に移動することに合意したキャンプ間の社会的結合によるものである。換言すると、牧畜民の集団性は支配や権力といった社会的領域から生じるものであり、限定された土地という地理空間からではない（Barth 2000）。この指摘から分かるように、バルトのいわゆる動態的な境界理論は、彼のインフォーマントである牧畜民の生業の在り方に深く規定されてきたものである（シンジルト 2016(b)）。

しかし、バルトによって描かれた牧畜民やその社会は、現在、ほとんど例外なく、近代国家の政治経済的、文化的な政策の影響下におかれ、様々な選択を迫られている。そうした中で、牧畜民はどのように振る舞い、その振る舞いから彼らの集団性の動態についてどのようなものが読み取れるかを考えることが、重要となる。

本稿は、17 世紀中葉、天山山脈からチベット高原に移住したオイラト系牧畜民の「親族の集まり」という現象を事例に、「親族の集まり」の文脈においては、彼らおよび彼らと深いかかわりをもつ周囲のチベット系牧畜民が、どのように自分たちの所属する集団を意識し、そして、国家の公定民族の境界をいかに乗り越えているかを民族誌的に描くことで、今日的な牧畜民にとっての集団のあり方を考察するものである。

図　青海省における河南蒙旗

2. 河南蒙旗のエスニシティとエコロジー

オイラトの末裔たちが暮らす、中国青海省黄南チベット族自治州河南モンゴル族自治県（以下、「河南蒙旗」あるいは「自治県」と略す）は、周囲をチベット族に囲まれた自治体である（地図）。総人口は 4 万人であり、その 9 割以上が中国の公定民族の分類でいうモンゴル族である。言語文化などの面で「チベット化」が進む河南蒙旗の牧畜民は、モンゴル人を意味するチベット語「ソッゴ sogpo」で自称する（シンジルト 2003）。

河南蒙旗のモンゴル族と周囲のチベット族との間では多くの共通点がみられる。まず、両者の生業形態は共に牧畜である。ヤクや羊などの家畜の個体性をめぐって豊かな文化を築いてきた（シンジルト 2012）（写真 1）。

写真 1　家畜自慢大会に参加する河南蒙旗の人とヤク

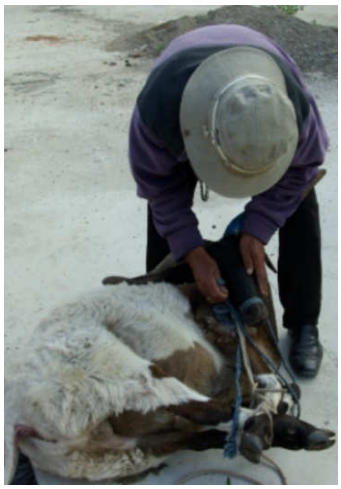

写真 2　窒息によって屠られる羊

また、屠畜の方法なども同じであり、時間をかけて家畜を窒息させてから屠るのである（写真 2）（シンジルト 2016(a)）。さらには、自らの民族集団の中には、相手側の部族を数多く抱えている点でも共通している。

2000 年代に始まった西部大開発事業の一環として、河南蒙旗と周囲チベット地域において、定住化が進められ、牧畜民は定住放牧を行うようになっている。こうした社会変動を経験する牧畜民たちの中においては、新しい現象が多くみられるようになった。その一つが、親族の集まりである。

3. ニェディの契機と機能

河南蒙旗を含むアムド・チベット地域、特にその牧畜地域では、2010 年前後から、親族の集まりを意味する「ニェディ nye 'dus」という現象が広くみられる。

牧畜民はニェディを行うことに熱心である。一族の発祥の地とされる場所などで人々は集まる。多い場合数百人にも上る。人々は宴会を開き歓談したり、寺を巡ったり、集合写真を撮影したりして親睦を深める。そして、ニェディの過程を記録する DVD の作成、始祖の歴史や子孫の現状をまとめた図書の編纂に励む。さらに、ニェディの一環としてウィーチャット（Wechat、微信）でチャットグループを開き、画像・動画・音声データをリアルタイムで共有できる親族共同体を構築するのである。これらの活動にかかる資金はすべて牧畜民の募金による。

では、なぜニェディが生じるようになったかについては、諸説がある。農耕民と違って牧畜民は自ら系譜を書く慣習がなく、自分たちの先祖（始祖）が誰なのかも知らず、その子孫が互いに敵対したり、場合によっては近親相姦をしてしまったりする可能性さえあるから、それらを防ぐためだという説がある。また、牧畜民は移動放牧ができた昔と違って、今は定住しその牧草地が分断されたため互いの行き来が困難になり、いつよりも寂しくなった牧畜民たちは、ともかく他人との交流を欲しがっているだけだ、という説もある。

いずれにしても、牧畜地域では、各種のニェディが、頻繁に行われているのが現状である。写真 3 のように、親に兄弟や従弟家族を中心に、明確にその血縁関係が確認できるような、小規模のニェディもあれば、写真 4 のような数百人に達する大規模のニェディもある。なお、写真 4 は河南蒙旗のアリグという親族のニェディの全てのプロセスを記録した DVD の裏表紙である。

写真 3　小規模のニェディ（2018 年 2 月。デゲル氏提供）

写真 4　大規模のニェディ

大規模のニェディの開催場所について、例えばその始祖が河南蒙旗の出自であれば、初回のニェディは河南蒙旗で行われるが、二回目以降は四川省や甘粛省などのチベット族自治州で行われるというパターンがみられるが、逆もまたしかりである。さらに、ラブラン寺などでお寺参りをしながらニェディを行うこともある。牧畜民は土地に拘束されず、ニェディのために長い旅をする（地図）。原理的にひとりの牧畜民には少なくとも 4 つのニェディ（両親の両親の家系）にかかわる機会がある。配偶者のニェディに参加することもありうるので機会は増える。

その一方で、同じチベット語話者が暮らす農耕地域においても親族の集まりがあることはあるが、それは写真 3 のような小規模のものだ。その範囲は明確な血縁関係を有する近親者同士（例えば、三親等内親族）に限り、集まる時間も正月などに限定される傾向がある。つまり、時間と空間に拘束されないような、牧畜地域の大規模ニェディに該当する現象は、まずみられないのである。

4. ニェディにみる親族

ニェディを「親族の集まり」と訳したが、実際、ニェディの中には血縁関係も姻戚関係ももたない者が含まれる。説明を求めると「ニェディ」というのは、「〇〇ロ」の人間の集まりのことなのだ、と人々は教えてくれた。「ロ ro」とは、キャンプ群、幕営地を意味するアムド・チベット語である。そのためなのか、実は、「〇〇ロ」の人間とされる者の中には、公定民族でいうモンゴル族もチベット族も含まれるケースがある。「〇〇ロ」と同義語としてよく用いられるのは「〇〇ツァン tshang」であるが、ツァンは「家」、「巣」や「部族」などの意味ももつ。

さらに、人々は「〇〇ロ」に属する個々の人間同士の関係を、「ニェリン nye ring」という語で表現している。「ニェリン」を直訳すると、距離を意味する「近・遠」になるが、意訳すると「親族」になる。よってニェディの和訳は、親族の集まりとなる。なお、地域におけるニェリンのニュアンスを分かり易く説明する際に人々は用いる一つの表現は「ラニェ sbra nye」である。ここでいう「ラ sbra」はキャンプのことであり、意味としてラニェは「近いキャンプ」になる。ラニェは実際のキャンプ同士の物理的距離の近さを指す同時に、キャンプに住む人間同士の心理的な距離の近さや仲の良さも指す言葉である。

「ニェディ」と「ニェリン」の共通語幹である「ニェ」の意味が「近さ」であるという事実から分かるように、ここで問題にされている「親族」は、親密さの感覚に基づく伸縮可能な遠近の問題である。よって、留意すべきは、チベット牧畜地域でいうニェリンとしての親族は、必ずしも血縁や婚姻関係を軸に展開されるものとは限らない、という点である。厳密に言うならば、「ニェリン」は血縁や婚姻関係に拘束されない親族ということになる。

人々が「〇〇ロ」に属しているということを言う際の「〇〇」の部分に用いられる言葉にはいくつかのパターンがある。まず、モンゴル（トルグート、トメト、ケレイト）とチベットの両民族（アリグ）の著名な部族の名に因んだ、ロがある。無論、だからといって、その部族の人間がすべて同じロであるということを意味しない。部族（あるいは氏族）は、「ツォワ」（tsho ba）である。

そして、もうひとつ「〇〇」の候補となりうるのは、始祖の外見的な特徴を表す言葉である。例えば、口元に立派なコブをもった始祖の外見的特徴に因んだ「カラ（口元のコブ）ロ kha spa ro」という名をもつ親族集団がある。また、その始祖個人の実名を用いることもある。それから、始祖となる者は必ずしも男性である必要はない。例えば、「アマ（お母さん）ロ a ma ro」のように、ある勇敢な母に因んだ親族集団名もある。

さらには、例えば、ある人物が主に河南蒙旗で親族の始祖として崇められているとしても、その人物はモンゴル系の出自をもつ必要はない。例えば、次

節で紹介するアリグのようにチベット系の出自をもつケースも多い。

逆に、元々は河南蒙旗のモンゴル部族の人間であったが、何らかの理由で河南蒙旗の最高指導者であった河南親王と仲たがいしたために、河南蒙旗を去り、今日でいう甘粛省甘南チベット族自治州、青海省ゴロク・チベット族自治州、四川省アバ・チベット族チャン族自治州などのチベット系牧畜地域に移住し、住み着くケースもある。その人々の末裔たちは、今は河南蒙旗の同族と一緒にニェディを開催することもある。彼らは自分たちの先祖のことをモンゴルであったことを認めながら、現在は公定民族の「チベット族」として社会活動をしている。

写真 5　ニェディ参加者の始祖

始祖の歴史はどうであれ、現在ニェディを行っている人々にとって、自分たちは同じ先祖の末裔であるということが、とりわけ重要である。そして、そのロの始祖に当たるその人物は、ほとんど勇猛果敢で数々の武勇伝を残し、カリスマ性があり尊敬されているという点においては、共通している。実際の血縁関係がなく、その人物の保護を受けたり、その影響下で暮らしたりしていた人たちやその末裔であっても、自分は「〇〇ロ」の者だと自称することは充分にありうるのである。そのように自称する人たちとその人物の末裔との間の関係は、ニェリン関係になる。

ニェディを考える上で重要なのは、人々には共通の始祖がいるということだ。その始祖は必ずしも大昔の人間である必要はない。むしろ数十年前の人物であるケースが多く、写真 5 のように、その特定の始祖の写真まで残されているケースもある。なお、写真 5 は写真 4 に映る人々の始祖とされており、当該 DVD の表紙を飾る。

特定のニェディにかかわる人々は、必ず共通の始祖をもつ。それだけの理由で、人々は自分自身を「〇〇ロ」の者だとアイデンティファイする。要するに、互いに会うため、ニェディに参加する。ニェディに参加するために、場合によっては数百キロメートルもの旅に出る。ここで分かるのは、人々のアイデンティティのよりところは、必ずしも土地や財産といった物理的な領域ではなく、突出した個人（始祖）という社会的領域のものであるということである。これが、アムド・チベットの牧畜地域でみられるニェディの実態である。これは、図らずもバルトの理論を再演しているかのようにも映る現象である。

5. ニェディにみる民族

これまでみたように、いわゆる先祖基点の親族の集まりであるニェディに参加するには、個人として今制度上、どのような民族に所属しているかは、それほど障害にならない。だが、中国の国民としてチベット高原に暮らすすべての当事者は、歴史を語る際も、原理的に民族（ミリグ mirigs）の存在を看過することができない。また実際、人々はニェディという実践を通じて、自分たちとかなり異なったニェリンと出会うこともある。こうした場面において、民族はいかに位置付けられているか。

写真 5 は、20 世紀初頭アメリカ人の宣教師が撮影したものである。映っているのは、河南蒙旗の有力な親族集団アリグ・ツァンの始祖に該当する人物である。アリグ・ツァンは多くの軍事家や政治家そして学者を輩出し、中には自治県行政府の最高長官を務める人物もいる。アリグ・ツァンが地域の有力な親族であるため、DVD のみならず、親族の歴史（族譜）は、一冊の本に編纂された（写真 6）。な

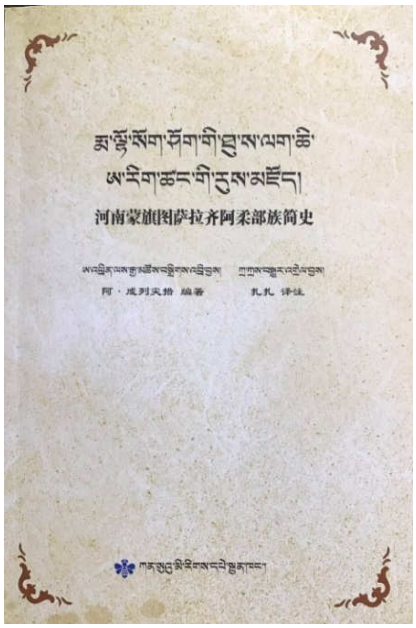

写真 6　河南蒙旗アリグの族譜

お、アリグは河南蒙旗のみならず、そのメンバーはアムド・チベット各地に分布する。

本書は次のように始まる。「アリグ・ツァンは、アムド･チベットで最も古い歴史を有するチベット民族の一部族である」。歴史的には、チベット族であったことをいっさい隠さず淡々と記述された。そのうえで、河南蒙旗の親王の保護を受けるようになったアリグ・ツァン（親族）がいかに河南蒙旗モンゴル族の歴史に貢献したかを踏まえながら、河南蒙旗に 200 年余り暮らしてきたので、今日、アリグ・ツァンは「モンゴル民族の一員になった」と締めくくる（a ’phrin las rgya mtsho 2015：6）。

本書の著者はアリグ・ツァン出身の者で、自治県行政府の指導層の重要メンバーでもあった。本質主義的な理解の下で民族を実体的に捉える中国の民族政策にも明るいはずである。それにもかかわらず、著者にとってアリグ・ツァンは、チベットとモンゴルの両民族の境界を何ら違和感もなく行き来することが可能である。このことから人々は、近代民族の文脈において緩やかに自らの始祖を位置付けていること、つまり、始祖に軸をおき、その軸を巡って民族が動されていることが伺えよう。

ところが、親族史関連の図書編纂が非日常的な行為であり、アリグ・ツァンも有力な親族集団だとすれば、そうではないニェディにおいて民族はどのように展開されているのかにも目を配る必要がある。伝統的な紙媒体の図書に比べて、牧畜民にとってより身近なコミュニケーションのツールとしてあるのは携帯電話である。ニェディが終了したらニェリンであるはずの人々は、空間的に遠く離れた、日常的に接することのない元の状態に戻ってしまう。携帯電話さえあれば、今はウィーチャットを通して人々は気軽にかつリアルタイムで交流できるようになる。グループチャットを開き、画像・動画・音声データをリアルタイムで共有できる親族共同体が構築されている（写真 7）。

他方、コミュニケーションの在り方がより便利によりリアルになるにつれて、共同体内でのトラブルも増えるようだ。特に若者同士の自民族への情熱の

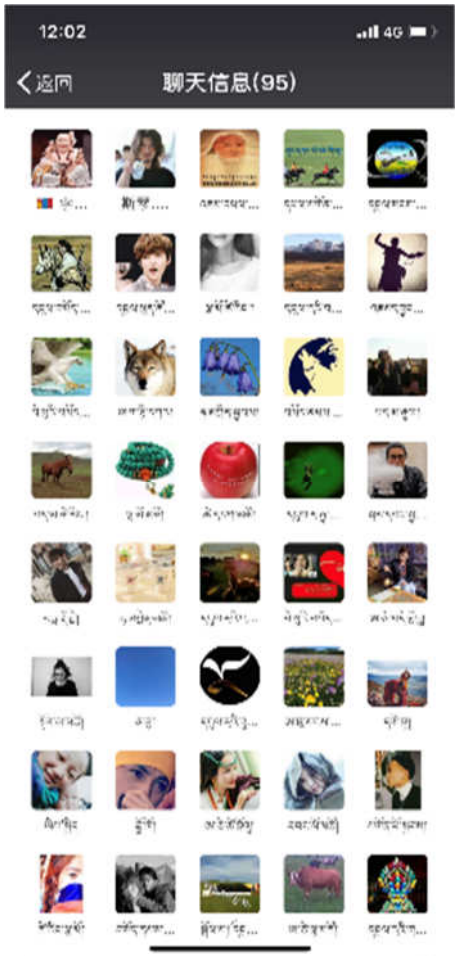

写真 7　グループチャット

写真８　グループチャット管理者

表し方が原因となり、互いに衝突しやすくなったという。ある親戚グループチャットの管理者（写真 8）によると、河南蒙旗周囲チベット族の若いニェリンからみた場合、時としてモンゴル語でチャット名を付けたり、自分たちに理解できないモンゴル文字でメッセージを発信したりする河南蒙旗のニェリンたちの派手なやり方が目障りとなり、ついて「炎上」してしまうような状況さえ生まれている。こうした緊張状況を打開するため、管理者が持ち出すのはやはり始祖の名である。「我々は共通に〇〇の末裔だからこそここにいるのだ。何々民族のためではない」と警鐘を鳴らすと、皆それなりに落ち着き、妥協しあうのだという。ここでも、始祖の存在こそ絶対的であり、その前では、民族をめぐる争いも二の次になることが分かる。

6. 民族を横断する親族

このように、ニェディの文脈では、民族（ミリグ）は親族（ニェリン）に包含され、親族は民族の境界を横断していく。その横断の様相は、これまでの図書編纂における始祖の民族の描かれ方、ウィーチャットにおける自身の民族についての語り方を通して、具体的に確認できた。本稿の登場人物は、皆例外なく国民国家の構成員である。国家が認定した公定民族を表すチベット語（ミリグ）もあり、彼らが意識的に民族の存在を無視することは、現実的に不可能である。だが、彼らがニェディの文脈では民族の境界を越えているということも事実である。

ニェディとは定住化後の牧畜民たちの間でみられた一時的な現象にすぎないかもしれない。しかしながら、この現象から我々は、農耕地域であれば、まずみることのできないものの存在に気付く。民族の境界を越えていく際に人々を組織しているのが、ニェリンである。ニェリンは親族しか訳せいないものの、ニェリンは必ずしも血縁や姻戚関係に基づくものではない。ニェリンが依拠するのは、我々には共通の先祖がいるという確信である。

ニェディ現象を引き起こした直接的な契機は、定住化やその後の寂しさかもしれない。現象の根源にあるのは、ニェリンの生成に代表されるように、人は特定の人物の下で集合するのだ、という人々の集団観である。この集団観は、バルトが主張した動態的な境界理論をその根底から支えていたインフォーマントたちの集団観と高い親縁性をもつ。ニェディは現象として新しいが、現象を生み出す集団観は目新しいものではない。定住という社会変動を経験し始めているものの、彼らの集団性は物理的な領域からではなく、社会的な領域から生じるのである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17H04538 の助成を受けたものです。

文献

a ’phrin las rgya mtsho（阿・成列尖措）(2015) *rma lho sog shog ge thu sa lag ci a rig tshang ge lus mdzod*（河南蒙旗図薩拉斉阿柔部族簡史）kan su ’u mi rigs dpe skrun khang（甘粛民族出版社）.

Barth, Fredrik (1969) Introduction. In *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organisation of Culture Difference*. Fredrik Barth (ed), pp. 9-38. Bergen: Universitetsforlaget.

Barth, Fredrik (2000) Boundaries and connection. In *Signifying Identities: Anthropological Perspectives on Boundaries and Contested Values*. Cohen A. P.(ed), pp.17-36. London: Routledge.

シンジルト（2003）『民族の語りの文法：中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社.

シンジルト（2012）「家畜の個体性再考：河南蒙旗におけるツェタル実践」『文化人類学』76（4）：439-462.

シンジルト（2016(a)）「優しさと美味しさ：オイラト社会における屠畜の民族誌」『動物殺しの民族誌』シンジルト・奥野克巳（共編）昭和堂 pp.327-360.

シンジルト（2016(b)）「共生の実際：中国西部における民族間の擬制親族関係」『文化人類学』81(3):466-484.